

醫學博士小口忠太君の小口氏病の研究に對する授賞審査要旨

小口氏病とは稀に見る先天性遺傳性夜盲症の一種にして、其特色として、眼底一面に灰白色乃至帶黃灰白色なるも、二三時間眼底を暗保するときは、其灰白調消失し、尋常の眼底に復するにあり。本病者の中心視力は完全なるも、少數の例に於ては一、〇に達せざるものあり。

小口君は明治三十九年本病の第一例を實驗し、翌四十年二月之を日本眼科學會雜誌に發表し、續て同四十三年第二例を同誌に、同四十五年本病の第三例に就て獨逸 *Gräfers Archiv* に報告せり。爾來本病は内外眼科醫の注意を惹き本邦に於ては河本、大西、水尾、中村(文)、石原、菅沼、高木、川上、足利、山中諸氏の報告あり、歐米に於ては本病の症例比較的少きものゝ如く、*Labor* は明治十年 *Hindler* 同十六年 *Dor* の記載せる夜盲症は多分本病ならんかと云ふも明かならず、大正二年維納の *Lindner* が類似の眼底所見を報告せるも進行性なるが故に本病に非らざる可く、*Augstein* は歐洲大戰中多數の兵士に本病に似たる網膜白變を見たることあり。昭和元年スペインに於て *Espidora Luque* は本病を實驗せしも、眼底暗保後の状態不明なりき。伊太利の *Giannini* も亦本病の如き例を報告し、獨逸の *Scheerer* は昭和二年本病を報告せり。

小口君は臨床的方面より本病を詳細に觀察せるのみならず、其眼を組織學的に研究し、組織學的方

面より臨床的症狀を説明し、夜盲の原因を闡明せり。其主なるものは圓錐兩細胞の權衝の尋常ならざると、異常なる圓錐體細胞數の比較的多きにあり。人類の網膜に於ける圓錐圓柱兩細胞の配置状態を見るは眼底黃班部、殊に其中心窩に於ては、殆ど全く圓錐體のみにして、黃班部を離るるに隨て圓柱頓に増加し、網膜の周邊に於ては圓錐體著しく減退するを普通とす。然るに小口氏病の網膜に在りては圓錐體の多き範圍は、黃班部附近のみならず乳頭及び顛顛方面に亘りて廣く存在し、外顆粒層の顆粒は視細胞の核なるが故に、本病者の網膜にありては外顆粒層薄く、上記の所見は共に恰も鳥の如き夜盲動物の眼に於けるが如し、又本病に於ては不定型の圓錐體所謂前置圓錐體細胞多く、鶏の如く夜間視力弱き動物の網膜組織に類似し夜盲の原因は組織學的にも證明せらる。其他網膜の顛顛方面に於て、圓錐體の短く且つ廣くして、七八ヶ月の胎兒の網膜に於けるが如きは、發育不全の證と爲すを得べし。

尙ほ小口君は色素上皮層と視細胞層との間に中間層を發見したり。此の層は、「フェスチン」顆粒の集團と色素上皮細胞及び視細胞なる圓柱圓錐體層の一部とより成る、或る動物にありては頗る厚き層をなせるを見本病に於ける眼底の灰白色乃至帶黃灰白色なる及び眼の暗保によりて眼底色の恢復する（所謂水尾氏現象）兩現象を、此層に存在せる色素の變化を以て説明せり。

遺傳關係に就ては、血族結婚及び患者の兄弟姉妹に、本病者及び他種類の夜盲者、白內障、近視痴鈍等の存することは、頗る注目を要す。

小口氏病は今や内外の成書に一種特別の病として、河本氏の提議せる小口氏病の名稱にて記載せられ、Lagrange は夜盲症なる大著述中に於て、先天性夜盲を二つに分ち、其第二として小口氏病を擧げ、解剖的所見をも詳細に論述せり。

之を要するに、小口忠太君は眼科學者の曾て記載せざりし先天性遺傳性夜盲症の一種を發見し、其臨床、組織、遺傳的方面を研究し、學者の認むる所となり學界に貢獻せること尠なからざるなり。